

## 自己評価報告書

平成23年 4 月 11 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320098

研究課題名（和文） 近世日本社会における中国情報の摂取と北方観の形成

研究課題名（英文） A intake of Chinese information and Formation of view of northern Territory in early modern Japanese society

研究代表者

浪川 健治 (NAMIKAWA KENJI)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：50312781

研究分野：歴史学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：北方観 北奥 中国 北東アジア ハリストス 通辞 蝦夷地分領

## 1. 研究計画の概要

本研究は近世社会の知識人が持つ北方認識・北方観がどのように形成されたか、またそれが一般の生活者にどのような影響を与えていったか、さらに近現代の民俗事象のなかで、それがなおどのように息づいているのかを、北方認識・北方観が生活者に取っても重要な意味を持っていた北東北をフィールドとして、異分野の研究者の共同研究により解明することを試みる。これらの地は、18世紀には対外関係の緊張から、本来予想されなかった「外圧」に早期に直面し、政治体制の枠組みのあり方のみならず、為政者から民衆生活に至るまで強く、他者としての異国とその文化を意識せざるを得なかった。とくに、近世日本社会における北方認識・北方観の形成には、同時代の中国であり、東北アジアまで版図とした清朝からの情報が重要な役割を果たしていたことは言を待たない。この清朝からの情報は主として、長崎に輸入される漢籍を通して得たものである。したがって本研究課題は、清朝史、清代東北アジア史、及び漢籍に関する専門知識が必要であり、本研究は基盤研究ながらグローバルな総合性を特徴に進められる。

## 2. 研究の進捗状況

科研「近世日本社会における中国情報の摂取と北方観の形成」については、集積したデータを基にして研究の体系化が進められており、蝦夷地における通辞の果たした文化的な役割の外、北方の緊張の高まりとともに派遣された弘前・盛岡藩をはじめとする藩政資料や藩士に関わる資料の解明に努めており、中国を介した東アジア理解から安政二年以降の欧米を軸とする近代移行期の北方世界に対する認識への変化が日本史あるいは東

洋史という枠組みを越えてグローバルな世界像として明らかにされつつある。

## 3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。  
(理由) 科研に関わる諸資料についてデジタル・カメラを用いた収集を図っている。また整理の上で利用のためにそれらを内容ごとに再度デジタル化を行っており、同時に利用の簡便さを計るためプリント・アウト、およびそのデータを分析して、随時、科研に関わる研究者に提供している。

「近世日本社会における中国情報の摂取と北方観の形成」研究の成果は前項の通りであり、これらによる研究成果は、適宜、学術論文として社会的に公開している。

## 4. 今後の研究の推進方策

本年度は、これまでの成果の上に立って、浪川は引き続き18世紀中期以降の地域における文化の展開を、弘前藩と盛岡藩の松前・蝦夷地へと流動する労働力や警衛に参画した藩士層によってもたらされた情報内容とそれが作り上げる知のネットワークから解明し、地域における北方観の成立と内容、その広がりやをさらに検証する。その上で近世の政治支配理念を検討し、藩士層がいかに東北アジアの知のネットワークを意識し、あるいは読み替えることによって教養や知の形成を行ったのかを考察する。この課題には、東アジア世界におけるあるべき領主像と近世日本社会におけるそれとの乖離を明らかにすることが展望される。楠木は、盛岡藩における那珂梧楼・那珂通世の養父子、内藤湖南に着目し、近世盛岡藩における漢学から近代日本の東洋史学へという知の展開を連続面として展望することを継続してめざすこととする。さらに、近世社会における漢籍の蓄

積のあり方とその特質を一般化するために、鶴岡藩を例として領主による集積と本間家などの商人のそれとのあり方の共通性と異質さを検討し近世社会における情報としての中国認識のあり方を考察する。

これらの研究は、浪川が担当する研究の核心部分の基礎をなすものである。古家は、岩田県立図書館・遠野市立博物館で民俗資料の調査を行うとともに、市内において若干の民俗調査を行う。山下は、近代初期にこの地に根を下ろしたハリストス教会が士族層とくに地方給人の漢籍による儒教的な思考体系の上にとどのように受け入れられていったのか、幕末期における北方警備に動員されそのなかに形成された北方観とかわらせることで、近代移行期の素地としての儒教的思考とその変容のあり方からアプローチし、社会・民俗事象との関係に盛岡藩あるいは仙台藩を例とした近世社会の知的世界を見据え近代への移行に考察を及ぼす。くわえて、吉村雅美(研究協力者)の協力を得ながら同じように境界地域にありながら近世初期に对外贸易を経験しつつも、対外関係の枠組みにそれを支える役として組み入れられた平戸との対照化を行いより特質を明確化する。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① 楠木賢道 「清太宗皇太極の太廟礼儀和堂子——関満漢礼儀的共処情況」『清史研究』2011 年第 1 期, 中国人民大学清史研究所, 2011 年 3 月, 印刷中, 査読有
- ② 浪川健治 「幕末における芸能興行とその受容」『歴史人類』39, 2011 年, 53-87 頁, 査読有
- ③ 浪川健治 「幕末における芸能諸集団と「差異」化の論理」『人民の歴史学』158, 2010 年, 1-12 頁, 査読有
- ④ 楠木賢道 「江戸時代知識分子的清朝研究和当代日本の“清朝史研究与美国“新清史”」『満学：歴史与现状』国際学術研究会摘要集』北京市社会科学院満学研究所, 2010 年 8 月, 28-35 頁, 査読有
- ⑤ 楠木賢道 「『両国会盟録』中所見志筑忠雄与安部龍平对清朝对北亜之理解——江戸時代知識分子的“新清史”」『民族史研究』第 9 輯, 2010 年 5 月, 392-437 頁, 査読有
- ⑥ 山下須美礼 「明治初期日本人信徒による「正教会」理解——士族ハリスティアニンに注目して——」『社会文化史学』53, 2010 年 27-40 頁, 査読有
- ⑦ 楠木賢道 「『二国会盟録』からみた志筑忠雄・安部龍平の清朝・北アジア理解」『社会文化史学』52, 2009 年, 1-30 頁, 査

読有

[学会発表] (計 2 件)

- ① 浪川健治 「幕末における芸能諸集団と「差異」化の論理」東京歴史科学研究会第 44 回大会, 2010 年 4 月 25 日, 立教大学
- ② 吉村雅美 「近世対外関係をめぐる認識形成——18 世紀前半の平戸藩を中心に——」東京歴史科学研究会第 44 回大会, 2010 年 4 月 24 日, 立教大学

[図書] (計 1 件)

- ① 浪川健治 語られたアイヌ像——記録と伝聞の間で——『ゆれる境界・国家・地域にどう向きあうか』, 梨の木舎, 2009 年, 89-106 頁